

第4話 後三年の役

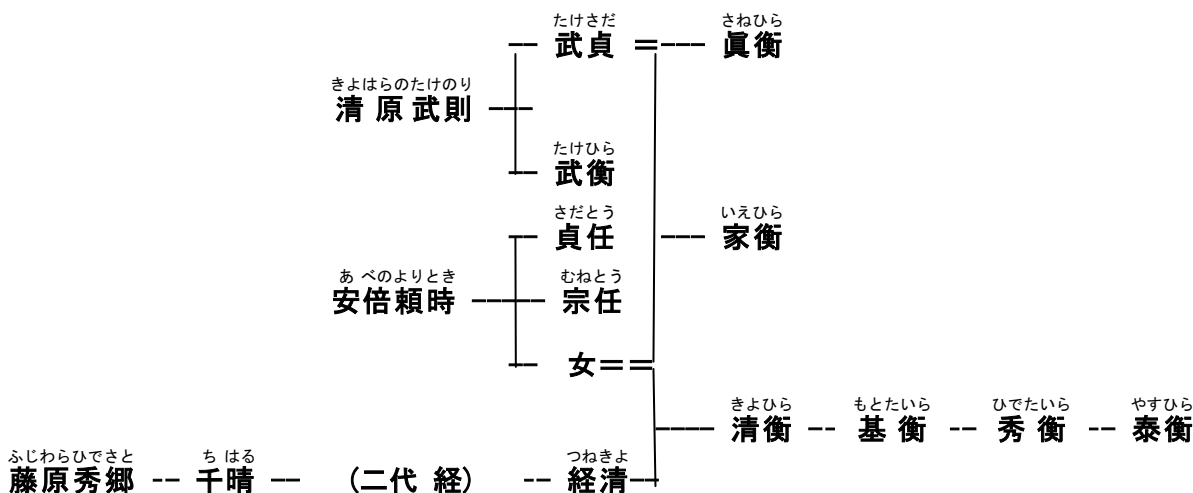
出羽の清原氏の内輪揉めが大きくなって奥羽地方が再び乱れる。

この乱でもまた源氏の勢力が伸びる。

前九年の役からおよそ二十年の後、第72代白河天皇の御代に奥羽地方が再び乱れた。これを後三年の役と言うが、源義家はこの乱の時にもまた功があって、源氏の勢力は大いに伸びました。

清原氏一族の争い

後三年の役は、初めは清原氏の一族同士の間の争いから起きました。清原氏は前九年の役に武則が官軍に身方して大功を立て、朝廷から厚く賞せられたために、その一門は大いに栄えた。子の武貞の代には安倍氏の領地であった陸奥の六郡をも合わせて、安倍氏以上の勢力を奥羽地方に振るっていたが、その子の真衡の時になって、ふとした事から遂に大きな乱となったのです。其の原因を知るには先づ清原氏の系図を見て置く必要がある。



すなわち、真衡と家衡とは父は同じですが母がちがい、家衡と清衡とは母は同じですが、父がちがっている。これは前九年の役に厨川の柵で貞任と共に殺された藤原経清の妻が、経清の子の清衡を連れて武貞の後妻となって、後に家衡を生んだからです。

こういう複雑な関係の中で、真衡は武貞の嫡子ですから最も勢力を得たのですが、彼には子がなかったため、海道小太郎成衡という者を養子として、これに嫁を迎えた。その結婚の披露の時に、ちょっとした事の行き違いからそもそもの争いがはじまったのです。

吉彦秀武

茲に出羽国の豪族に吉彦秀武という者がいました。武則の甥で、且つ武則の娘を妻としていたので、真衡には義理の叔父に當る。前九年の役には、真衡の父の武貞と共に武則に従って出陣し、一方の将となって到る処で功を立てたほどの人で、今では一族中での長老でしたが、清原家の嫡統を嗣いだ

第4話 後三年の役

真衡さねひらに対しては主従しゅじゅうの関係になっていたので、謹つつしんでこの結婚祝いいにやって来た。そしてその地方の習慣しゅうかん通り、お祝しゆぬいの品々ばんを乗せた朱塗えんさきりの大きな盤ひざまつを自分で持って、奥の部屋えんさきの縁先ひざまつに行いって眺のぞき、その盤ばんを高く頭ささの上に捧さねひらげて真衡さねひらの出でて来るのを待まちっていた。

ところが、その時とき、真衡さねひらは坊さんごを相手かこに碁ごを囲かこんでいましたが、それに夢中むちゅうになって、取次とりつぎの者の言葉ことばに気がつかきなかつた。秀武ひでたけは年寄としよりのことですから、そのうちに力ちからが尽つきて、腕うでも痺しびれるようになって来た。彼はだだんだん腹はらが立たってきた。たとえ主従しゅじゅうという事ことになつていても、自分おれは正ただしく一家いけで、それに年寄としよりである。こうして膝ひざを屈かがめて苦くるしい思おもいをしていいるのに、いつまでも出でて逢あわないとは余あまりに人ひとを馬鹿ばかにしている。よし、向むかうがその気きならば、ここっちにも了りょうけん簡けんがあると、折角せつかく持もつてきた祝しゆぬいの品々ばんを庭先つに投なげ散ちらして、家来けらいを連つれて本国ほんこくに帰かえってしまった。

真衡も怒る

こちらは真衡さねひら、囲碁いごが済すんだあとでこれを聞きいて大おいに怒こった。知しつていて逢あわなかつたのならば悪わるいが、自分おれは知しらなかつたのだ。よしまた多少あやまの過あやまちがあつても、今日けふこの真衡さねひらに対たいしてそういいう振ふる舞まいをするとは怪けしからないい。さては秀武ひでたけの老おいいばれめ、何なにか含こむところがあつて真衡さねひらに恥はぢをかかかせようとしたのだな。よしその儀ぎならばそのままにしておおくものかと、遽にわかに秀武ひでたけを討うつために軍勢もよおを催もよおした。

一方ひ方でたけ、秀武ひでたけは一旦まの怒こりに任まかせて帰かえつては来きたものの、自分おれ一人ひとりで真衡さねひらと軍いくさをしても勝かちつ見込みみは無むろん無論むろん無なかつたので、清衡きよひら、家衡いえひらの兄弟けいを身方みかたにすることを考かんがへた。彼らかれらが真衡さねひらの勢せいのいいのを嫉ねたんでいいるのを知しつていたからです。果はたして二人ふたりは秀武ひでたけからの頼たのみを聞きくと、喜こんで同どう意いした。そして真衡さねひらが秀武ひでたけを討うつために出羽でわに向むかつた留守るすを襲おそつて、その妻つま子を捕とらえ、その家いへを焼やいて、自分らおれらが真衡さねひらに取とつて代かわろうと企くてました。

真衡さねひらは途中ちゆうちゆうまで出でかけて行いつて、あとで清衡きよひら、家衡いえひらが方々かたの民家たみかを焼やき払はつたりして乱暴らんぼうを始はめたといいうことを聞きくと、大おいに驚おどき且かつつ怒こつて、先まづ彼らかれらを討うつてから改かめて秀武ひでたけを征伐せいばつしようと、急いそいで軍いくさを班かした。清衡きよひら、家衡いえひらの二人ふたりは、既さに真衡さねひらの留守るすの館やかたを攻せめかけていたが、これを聞きくと、あわてて軍勢いくさをまとめて逃にげた。真衡さねひらの大軍おほいくさには迎むかひも敵かなわないことを知しつていたからです。

斯こうして戦いくさいらしい戦いくさいもしなかつたが、彼らかれらの間まは再び許もとの平和へいな状態じたいには帰かえらなかつた。互たがいに軍いくさの用意よういをして相手あかの隙すきを窺うかがっていました。

義家の調停

そこへ陸奥守兼鎮守府将軍むつのかみ ちんじゆふしやうぐんとして下くだつて来たのが源義家みなもとの よしいえです。彼は清原家きよはらの人々たの争あいを聞きくと、直ただちに関係者わかいを国府すすに呼よんで和わ解かいを勧すすめた。

「私わたくしの遺恨いこんを以もつて兵へいを動うごかすといいう事は、上たてまつは朝廷ていに対したい奉たてまつつて恐おそれ多いことであり、下したは民たみを苦くるしめることにもなつて、よろしくない。今いま度ど、義家よしいえが當国とうこくの守かみとなつて下くだつて来たに就ついては、諸君しよくんとは旧ふるいなじみのことであるから、度々たびたび逢あつて、昔むかしの物語ものがたりもして楽たのしもうと思おもつて喜こんでいたのに、

第4話 後三年の役

きゆうてき なさ うら よしいえ まか
仇敵となっているとは情けないことだ。たとえば互いに多少の怨みはあっても、この義家に委せて
なかなお うら し よしいえ
仲直りをしたまえ。もしなご恨みを残して、強いて戦いを起こすならば、よんどころなく義家が相手と
かんぶ たまわ ちゅうりく ちようてき ちゅうきん
なり、官符を賜って誅戮を加えることにする。そうなれば諸君は朝敵の名を受け、祖先の忠勤をも
む
無にすることになるであろう。」

と、事を分けて説いて聞かすと、もともと全くの誤解から起こった事で、大した理由のあった訳でもないのだから、眞衡と秀武とは今更のように恥じ入って、一も二もなく和解した。本元の二人が既に
ふふく
和解すれば、あとの者らに不服のあろうはずがない。

いえひら がんめい 家衡の頑迷

きよひら さねひら おぢ あた たけひら よしいえ ひと いえひら き
清衡も眞衡らの叔父に當る武衡も、皆、義家の言葉に従ったが、独り家衡だけが聴き入れない。た
とえ国司の命にせよ、勅命にもせよ、一旦敵となって戦いを交えた以上、その勝負を決せずに和睦するの
ちよくめい
は家衡のいさぎよしとするところでない飽くまでも頑張った。清衡は同腹の兄弟でもあり、最初一緒
いえひら あ がんば きよひら どうぶく
に秀武に荷担した関係もあるので、わざわざ家衡のところに行って、理非を説き、順逆を説き、利害を
ひでたけ かたん いえひら りひ じゅんぎやく
説いて、懇々と和睦を勧めたが、それでも家衡は聴き入れない。果てはこの陸奥の国に住めばこそ守の
こんこん すす いえひら かみ
義家にもかれこれ言われ、一門の奴らにもかれこれ言われるのだから、いっそ先祖の国に帰って鼻を明か
よしいえ はな あ
してやろうと、俄かに出羽の国に引き移り、沼の柵 - 羽後国の沼館 - に籠って密かに戦争の用意をして
にわ ぬま さく こも ひそ
いました。

いえひら よしいえ よしいえ
家衡がいなくなった後の陸奥は全く平和でした。清原家の人々は皆よく義家に仕え、義家もまた
じんじ こころ のぞ へいおん おさ しらかわ えいほう
仁慈の心を以って民に臨んだので、国内は平穩に治まった。白河天皇の永保3年の秋に初めて着任し
おうとく よしいえ にんき み
て既に3年に近い月日が経って、応徳3年の春になった時のことです。義家は任期もだんだん満ちて来
るから、一度は出羽の方にも行って見ようと、僅かばかりの家来を連れて、花見がてらの小鷹狩りに、奥
わづ こたかが
羽の国境を指して出かけました。

いえひら じせつ さねひら かた
それを知ると家衡は喜んだ。3年以来、待ちに待った時節が今こそ来た。眞衡に片びいきして、自
の もの うら むく よしいえ
分ひとりを清原家の除け者にした時から、いつかは此の恨みを報いてくれようと思っていた義家めが、今
こぜい なつ むし
度小勢でやって来るとは天の与えだ。飛んで火に入る夏の蟲。ただ一戦に討ち取ってくれようと、全
すじ ちが ふくしゅうしん か あつ けんそ みち ま ふ
く筋の違った復讐心から、すぐさま大勢の悪者共を掻き集めて、国境の険阻な路に待ち伏せした。

よしいえ
義家は途中まで来て此の事を聞くと、別に驚きもしなかったが、馬鹿を相手にしないに限る、どうでも
出羽に行かなければならないのでもない、そのまま引き返しました。

いえひら たけひら がったい 家衡と武衡の合体

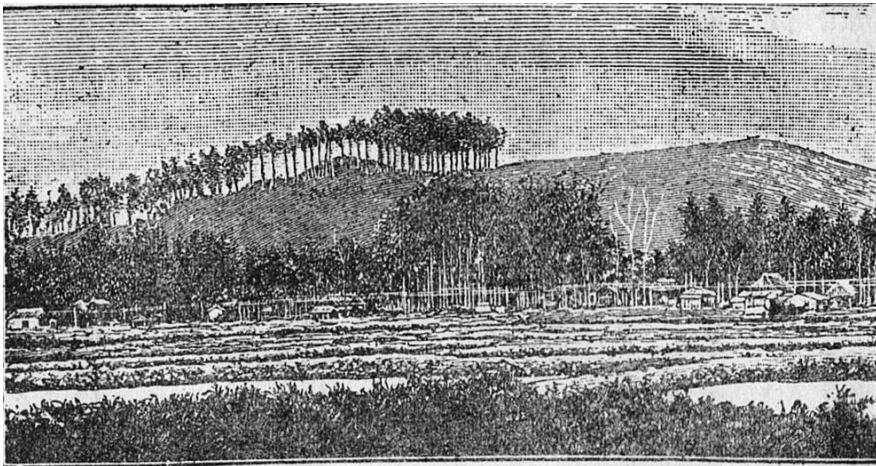
いえひら よしいえ いえひら いせい
ところが、家衡は自分が相手にされないのだとは気がつかない。さすがの義家も、この家衡の威勢
いば
に恐れて引き返したのだと考えて、盛んに手下の悪者共に威張って見せた。その評判が次第に広く伝わ
おぢ たけひら さっそく いえひら ほ あ
ると、陸奥にいた叔父の武衡が今度は大いに喜んで、早速沼の柵にやって来て家衡を褒め上げた。

いえひら よしいえ
「えらいぞ家衡、お前は義家を追い返したそうじゃないか。一人でもあれほどの名将を敵に取って

第4話 後三年の役

追い返したのは、お前一人の名誉ばかりではない、清原家の名誉である。昔、彼の父の源頼義が安倍貞任を征伐したときにも、自分の力だけでは勝てないで、遂にわが清原家の援助を受けて僅かに功を奏したのだ。今の義家とても同じことだ。いかに名将でも兵はいくらもないのだから、こちらが一致してかかれば恐れるに足らない。今までも義家を快く思わない者は大勢あったのだが、いかにせん、こちらに大将となるべき者がなかったから、止むを得ず従って来ているのだ。今度は、お前がこの名誉を得たのを機会に兵を挙げれば、一族一門は勿論、近国の者どもまで身方につくに決まっている。どうだ、おれも一緒にやるから、一奮発して義家を滅ぼしてしまおうではないか？」

こうおだてられると、さもなくとも鼻を高くしていた家衡のことですから、忽ち大喜びで賛成した。そこで二人は相談の上、沼の柵よりも遙かに要害堅固な金沢の柵一羽後の金沢一に移って、義家に反旗を翻した。すると、果たして武衡の予想の通り、清原家衡は義家ほどの名将を只一人で追い返した豪傑だという評判が高く立って、この大将の下で一高名して家をも起こし、名を挙げようという、とんだ間違った了簡の者共が、出羽の国中はいうまでもなく、遠く越後、越中の方からも続々と集まって来た。武衡、家衡の勢力は大いに振った。



秋田 横手市

金沢の柵の址

正面の山が柵の址のある所、 山下にあるのは金沢町

義家は折角穏やかに済まそうと思っていたのに、こうして謂れもなく反抗するのを見ると、大いに怒って、ついにその年の七月、自ら大軍を率いて金沢の柵に押し寄せました。

けれども、武衡、家衡の方にも既に十分の用意が出来ていたので、少しも驚かずに応戦して、思いの外に激戦が始まった。義家の部下でかの鎌倉権五郎平景正が剛勇の名を轟かしたのは、この戦いの時です。

鎌倉権五郎平景正

景正はその時16才の若武者でしたが、真っ先に立って戦っているうちに、敵の矢が来て右の目を射通した。普通の者なら逆も我慢が出来なかったでしょうが、彼はその矢を半分折ったままで自分を射た敵を追いかけて、それを射殺してから陣屋に帰り、馬から下りて、胃を脱いで、「景正残念ながら矢傷を受けた、抜いてくれ」と仰向けに寝た。親友の三浦平太郎為嗣が左の手で景正の額をおさえ、右手に

第4話 後三年の役

力を入れて抜こうとしたが、固くて抜けない。土足のままで景正の顔を踏まえて、両手をかけて抜こうとすると、景正は寝たままで刀を抜いて、下から為嗣を突きかけた。「や！なぜ突く？」と驚くと、景正は、「矢に中って死ぬのは勇士の本望だ。なんで生きながら顔を足で踏ませるものか！」といった。為嗣は謝って、今度は膝を屈めて顔を抑え、その矢を抜いたというのです。その頃の武士の気概を知る一つの挿話であります。

こうして合戦は7月の初めから始まって、9月の末まで続いたが、城中は少しも弱らず、却って寄せ手の方が兵糧がつづかなくなって勢いが衰えた。義家の苦戦は、ちょうど前九年の役の源頼義の苦戦とよく似ていた。その上、今度の戦は、義家自身に対して反抗した武衡、家衡を征伐しているのであって、官符を賜っての追討ではないので、奥州以外の兵糧を調達することが出来ない。軍勢は関東諸国から源氏の恩顧を受けた武士が続々と集まって来たが、糧食の無いのに義家は困った。それに、寒さもだんだん強くなって来るし、ぐずぐずしていて、前九年の役の河崎の柵の二の舞をするでもないと、十月に入ると義家は俄かに囲みを解いて引き上げました。

武衡、家衡はいよいよ鼻を高くした。

義家は陸奥の国府に帰ると、直ちに使いを京都に馳せて、武衡の叛を朝廷に訴えて、追討の官符を下し賜るようにと奏請したが、朝廷ではどこまでもこれを私闘と見做して許さなかった。

新羅三郎義光

其の頃、義家の弟の新羅三郎義光は、右兵衛尉として京都で御所の番を勤めていたが、これを聞くと大いに驚き、たとい官符は下し賜らぬにもせよ、現に兄が苦戦していると知っては、弟の身としては行って援けずにはいられないと、朝廷へ暇を願って、陸奥へ下り、兄の軍に参加して働きたいと申しあげた。

けれども、朝廷ではやはり私闘の荷担をするものとして許さなかったので、義光は、いろいろと考えて悩んだ末に、後日もしお咎めを受けようとも、今、この遠い都で、空しく兄の難儀を心配してはいられないと、ついに二月下旬のある夜、こっそりと御所を抜け出して、数人の家来を連れて、密かに奥州に旅立った。豊原時秋が義光の跡を慕って、ついに相模の足柄山で、弥生の空の朧月夜に、笙の秘曲を授かったという話はこの旅の時のことで、義光の奥州下りを一層美しい物語にしています。

さて、義光の一行が陸奥の国府に着いた時には、春も既に末になって、雪もそろそろ消えかけて来たので、そこでは出羽へまた出陣しようとする軍の準備を忙しくしていた。思いもかけない義光の下向と聞き、義家は驚いて、急いで逢って、どうした事かと尋ねると、義光は久しぶりで見る兄の無事を喜びながら、遙かに苦戦の様子を聞いて、心配の余り、自ら官を辞して下って来たと言った。

義家は、お暇を賜らないのは後のお咎めもあろうと思うが、その身に代えてまでもこの義家を援けてくれようというのは有りがたいと、涙を流して、「今日、お前が来てくれたのは、亡くなられた父上が生き返っておいでになったような気がするぞ。お前が副将軍になってくれたら、武衡、家衡の首を取る

第4話 後三年の役

のは何でもないと喜んで言ったので、これを聞いた全軍の士気もいよいよ振るった。

飛雁列を乱る

けれども、武衡らの威勢はその年になっても少しも衰えなかった。戦いのうちに春は去り夏も過ぎて、またしても秋の九月になった。今度こそ如何にしても攻め滅ぼそうと、義家は数万の軍勢を率いて、特に兵糧をも豊かに備えた上で、その月の16日、金沢の柵に近い秋の野原を進んで行くと、ふと前方の空に方って、今まで列を正して渡ってきた一群の雁が、急に列を乱して八方へ飛び散った。

義家はそれを見ると、遽かに馬をとどめて、「この野原には伏兵がいる。四方を取り巻いて、捜して討ち取れ」と命を下した。血気の若者共がわれもわれもと馳せ向って、捜して行くと、果たしてその藪蔭、ここの岩陰などから三百余人の敵兵が逃げ出した。源氏の兵は、まるで兎でも狩り立てるように、喚き叫んで追い立て追い詰め、忽ち何十人かを射止めると、その余の者は、這這の体で柵の中に逃げ込んだ。

だが義家は、どうして伏兵のあることを知ったのか？ それには一つの面白い挿話があります。

義家と兵法

前九年の役が終わって、父の頼義と共に京都に帰った時に、義家は関白藤原頼道の邸に行って軍の話をしたことがある。その時、一緒に聞いていた学者の大江匡房が、別室で暫く休んだ折に、「義家は立派な武士だが、惜しい事に兵法を知らない」と誰に言うともなくいったのを、降参してから義家の忠実な家来となって、その日も供をして来ていた宗任が、ふと物越に漏れ聞いた。大いに腹を立て、「我が主人ほどの名将を、くさしくさるとは怪しからん」と、義家の出てくるのを待ってその事を伝えた。義家の言葉一つであの学者づらめをこっぴどい目に遭わせてくれようと宗任は思っていたのです。

ところが、義家は少しも怒った様子もなく、「いや、尤ものことだ」と、却って宗任の猛り立つのを宥めているところへ、ちょうど匡房が出て来た。義家はそのそばへ進み寄って、丁寧に会釈してその日は別れたが、後、終に匡房の弟子となって兵法を学んだ。彼には自分が十四の年からはるばる奥州に下って、日夜実戦にこそ馴れていたが、一向に書物を見る暇はなかったので、学問の上で足りないところのあるのは当然だと、直ぐに自分で気がついたのです。さすがに古今の名将といわれるほどの人は、平生の心掛けから違っている。其の時学んだ兵法の中に、「野に伏兵のある時は飛雁列を乱る」という事があったので、乃ち、今、敵の計略を看破ることが出来たのであります。

「あの時、若し匡房卿に就いて学ばなかったなら、今日、武衡らのために討たれたかも分からない」と義家は部下の将士に言って、まことの武士となるためには、文の道も忽せにしてはならないと話して聞かせたと伝えられています。

剛臆の席

さて戦いはその翌日から始まって、官軍は義家、義光の兄弟を始め、清衡、秀衡の諸軍勢が四方から烈しく攻めかかったが、武衡、家衡の二人が心を合わせて、よく防いだので、柵は中々陥らない。義

第4話 後三年の役

家はなおも士卒の元気を励ますためにと、日毎に剛臆の席というのを定めて、夕食の時に、その日の戦いに最も勇ましく働いた者を剛の第1席に据え、その次の者を第2席、第3席と続いて座らせ、又、最も臆病であった者を臆の席の頭として、このほうにもその列を立てた。誰にしても大勢の前で臆病とされるのは好まないから、年を取った者も若い者も争って進み戦ったが、それでも柵は中々陥らない。強いて攻めれば身方の死傷が多くなるばかりでした。

兵糧攻め

かの吉彦秀武は、この乱の元来の起こりは全く自分の軽率から起こった事であるから、心から申し訳なく思って、初めから官軍に従って、一生懸命に働いていたが、ある日、義家の前に行き、「この調子で攻め続けていては、身方の兵を傷つけるばかりでたいした効もあるまいと思います。いかがでしょう、いっそ遠巻きに城を囲んで、兵糧攻めにしては？ 城中には女や子供も大勢居りますし、いつまでも兵糧がつづこうとは思いません」と言った。この遠巻きの策には義家も賛成でしたので、それからは諸方面の戦いを止めさせて、ただ見張りだけを厳重にして日を送っていた。

賊徒の方でも、寄せ手が兵糧攻めにするつもりだという事には直ぐに気がついたが、なにしろ、もう秋も過ぎて冬に入っている事だし、今10日を経れば雪が降って寒くなるから、いかに寄せ手が頑強でも、逆もあの野っ原の仮屋で我慢の出来る筈がない。今に諦めて陣を引いて帰るであろうと平気に構えていた。

実際、雪は間もなく降り出した。寒さも急に烈しくなった。けれども官軍は引こうともしなかった。寒さのために凍え死にそうになる兵士も出たが、義家が自ら陣屋陣屋を見まわって、自分の体で温めながら優しくいたわってやったので、兵士は皆感泣して、この大将のためになら命は惜しくないと思えます。とますます元気を振起しました。

武衡らの予想は違って、囲みはいつになっても解けなかった。兵糧は日に日に減って来る。出て戦おうにも官軍が相手にならない。ついに詮方尽きて、武衡は義光の陣に使いを寄越して降参したいといってきたが、今までの彼らの不埒を義家は深く憎んでいたもので、許さなかった。すると、今度は一人でも多く口を減らして、一日でも長く兵糧を保たせようとするために、わざと弱い者を柵の外に逃げ出させた。義家はそれが敵の窮策であるのを知ると、一々捕らえて殺させたので、後には逃げ出す者もなくなった。

奥羽平定

陣中の兵糧はいよいよ乏しくなった。今はどうでもして逃げ出さなければ餓死する外はなくなったが、その頃、雪が降り続いて道を埋めていたので、空しく4日5日と過ごしていた。ある夜、雪が歇んだ。義家は急に全軍に命を下して、「賊徒はこの明けがたにきつと逃げ出す。身方の士卒が寒さに苦しめられていては役に立つまいから、凍えた兵共は仮屋に火をつけて手足を烘るがよい」といいました。諸軍は暖を取りながら不審に思っていると、果たして、その明けがたに、賊は城に火を放って逃げ出した。

第4話 後三年の役

火の手のあがったどさくさに紛れて落ちて行こうと謀ったのです。

しかし、寄せ手は宵から手足を烘って、今か今かと待っていたので、それ来たとはばかりに、一度に四方から攻め上って、一人も余さないようにと追い詰めた。賊将の武衡は池の中に身を沈めて、草で顔を隠していたが、ついに見つかりて誅せられた。家衡は下男の姿になって逃げようとするところを捕まって殺された。その他、相当に名のあつる賊徒48人が悉く誅せられて、ここに奥羽地方は全く平定した。実に第73代堀川天皇の寛治元年11月15日の事でありました。



岩手 平泉 中尊寺の金色堂
(堂の四面内外共に金箔をはってある)

藤原清衡

この戦争の間に清原真衡は病死し、養子の成衡は官軍に従って戦死してしまったので、清衡が清原氏の領地を承継いで陸奥の押領使となった。彼は本姓の藤原氏を名告り、住居を平泉 — 今の陸中国西磐井郡平泉 — に移した。その子の基衡は陸奥、出羽の押領使となり、孫の秀衡は鎮守府將軍に任ぜられて、ますますその勢いは盛んとなった。この藤原氏がいかに盛んで豪華を極めたかは、今も平泉に残っている中尊寺の金色堂に善美を尽くした結構な建築をみせているのでもその一端は推察されます。この藤原氏はまた後に源義経の世話をしたのでも名高くなっています。

勿来の関

さて義家は、既に国守の任期も満ちていた事だし、早く都に帰って軍の次第を朝廷に奏上しようと、次の年の春に陸奥の国府を立った。陸奥と常陸との国境である勿来の関にさしかかったのは、ちょうど桜の花が咲き満ちて、吹くとも見えぬ春風に散りはじめたころでした。長い間、明けても暮れても軍の事ばかりに身も心も疲らしていたあとで、今、久しぶりにこののどかな景色を見ると、義家の心は何とも言えない平和な、優しい気持ちでいっぱいになりました。彼は暫くの間、馬をとどめてうっとり眺めていたが、やがて、

吹く風をなこそその関と思へども 道もせに散る山ざくらかな

と口吟んだ。戦場に在っては鬼神のように思われていた義家が、落花の風情に対してはこの優しい心を見せているのです。彼に従った将卒も皆、暫くはうっとり何物も打ち忘れて、美しい花吹雪の中に立っていたと伝えられます。その様を想像すると、まことに美しい一幅の絵となってわれわれの頭に浮かんで来るではありませんか。

源氏と東国の武士

第4話 後三年の役

よしいえ いくさ なんぎ そうじょう こう
義家は都に着くと、今度の軍も前九年の役と同じように中々の難儀であった事を奏上して、功のあ
る将卒に賞を与えてくださるようお願いしたが、朝廷では初めからよしいえ しとう みな
私闘に賞をやることは出来ないとの事で許さなかった。それで、よしいえ ざいさん わ
に与えました。これがために彼の名望はいよいよ高く盛んとなり、わけても彼に従っていた東国の武士
は深くその恩を感じて、源氏の為にならばどんな働きもしようという気になりました。後に源頼朝が東
国の兵を集めて全国を平定し、幕府を鎌倉に開いて、武家政治を始めるようになったのも、一つはこの時
代から深く恩顧を施して置いたお蔭であります。

(第4話 後三年の役 終わり。次は前頁に戻り、第5話 院政 へ)